ミニ特集を終えて

本ミニ特集は，「土木の原点である土や木は，現在どのように活用されているのであろうか。特性を活かし，より進化した形で利用されているのであろうか。」という興味から企画した。

昨年の7月初旬，学会で秋田を訪れた。そのついでに，能代市にある秋田県立大学木材高度加工研究所を訪問した。爽やかな木の匂いに包まれた研究所で，木材の有効利用について種々の研究がなされていた。とても新鮮な気持ちになった。土木学会に7月下旬に立ち寄ったとき，講堂で「木橋技術に関するシンポジウム」が開催されていた。鋼構造委員会の木橋技術小委員会の主催である。講演集を見て，木橋が多くの人々によって研究されていることを知った。せっかくだから，学会誌に取り上げてみたくなった。

私事になるが，10年前にアフリカのケニアに大学を造る，JICAのプロジェクトに参画した。20年の歳月をかけたプロジェクトは3年前に終わったが，引き続き「アフリカ人造り拠点プロジェクト（AICAD：African Institute for Capacity Development)」に深くかかわることになった。「アフリカ人が自分たちの力で，アフリカに内在する問題を解決し，貧困の削減を図る」という，JICAが威信をかけて取り組んでいるプロジェクトである。私は工学分野から「貧困削減」を具現化する方法を考えている。

写真を見ていただきたい。アフリカの田舎道は，いったん雨季になり雨が降ると，泥田のような状態になるところがある。乾期であれば，まったく走行に問題のない道である。すべての区間でこのような状態になるわけではなく，泥田になる部分は毎年決まっている。日本なら土を置換するか，セメント・石灰・ジオテキスタイルなどを用いて立派な道に作り直せる。お金のかからない方法は，ないのか。それでなければ，アフリカの人たちが自分で問題を解決できない。

私の持っている答えは，ミニ特集の中にある。「土のう」「木の橋台」「木の橋」でぬかるんだ部分を通過するのである。乾期だけの，安上がりの仮設道路。構造は頭の中にある。この道の先には，豊かな換金作物を生み出せる農場がある。道がこれでは運び出せない。いつの日か，住民が自らの手で乾期だけの迂回道路を「素材を活かした」材料で，作っている日を夢見ている。

(AICADのホームページ：http://www.aicad.or.ke)

ミニ特集とは

2000年1月号から，土木学会誌は「特集重点主義」を徹底し，毎号に50ページ程度のまとまった特集を組んできた。1年前から50ページが30ページ程度になり，少し量が少ない特集になっている。

実はこの特集を作るにあたって，掲載9か月前から掲載内容を編集委員会で審議している。特集を作成する委員は4つのグループに分かれており，毎号特集を掲載することから，年間各グループ3つの特集を作成する必要がある。その仕事量たるや相当なものである。

編集委員会では，記事の新鮮さと読める量の限界について議論がなされてきた。一つの提案がここに掲載した「ミニ特集」である。ミニ特集は掲載5か月前から企画し，10ページ程度の紙面で企画される。

従来の「特集」はこれからも毎月掲載する。ただし今後，グループが作成するものとは別に，学会の委員会活動や支部の活動の助けも借りて，コミュニケーションを高めた形で作成していく予定である。即効性のトピックスは「ミニ特集」で対応したい。

（土木学会誌幹事長　木村　亮）